老年期の心理社会的課題への関与からみた類型と関連要因

深瀬裕子・岡本祐子

The type of psychosocial tasks and related factors in the elderly

Yuko Fukase and Yuko Okamoto

本研究では，高齢者が各心理社会的課題にどのように取り組んでいるのかを，対象者の基本的属性，心理社会的課題への取り組み方，生活歴などとの関連から総合的に検討することを目的とした。20名の対象者から得た語りを，第8課題を構成する2つの指標（過去および現在の人生への取り組み方，自分の死への取り組み方）から分類し，5つの類型を抽出した（統合群，過去の統合・死の否認群，後悔・死の統合群，後悔・否認群，語りなし群）。分析の結果，第8課題への肯定的な取り組みは，他の7つの心理社会的課題への肯定的な取り組みと関連しているが，これは自分の死や過去の危機的状況からある程度距離を置いているためと推察された。さらに過去の葛藤を統合するには，自分のあり方への肯定的な取り組みが重要であることが示唆された。また，特に女性は青年期前後に主体性を発揮しにくかったことがうかがわれ，自己のあり方への取り組みにはコホートと性別が関連していることが指摘された。今後は，質問項目，分析方法を精緻化し，その妥当性を検討することが課題として考えられた。

キーワード：老年期，心理社会的課題，類型，事例，E. H. Erikson

問題

老年期に認められる心理社会的課題[1]は，第Ⅷ段階に顕著となる統合 対 絶望に加え，老年期以前に顕著になる7つの心理社会的課題も発達変容して現れると考えられる（Erikson，1950 仁科訳 1977・1980）。しかし高齢者を対象とした研究では，第8課題である統合 対 絶望のみに着目したものが多く，8つの心理社会的課題全てを総合的に検討した研究は少ない（深瀬・岡本，2010；日下，2004；岡本，1997；Viney & Tych，1985）。Viney & Tych（1985）は，心理社会的成熟を検討するため，6-86歳を対象に面接調査を行い，各心理社会的課題への取り組み方をパーセントで現す試みを行っている。また岡本（1997）は，高齢者を対象にアイデンティティ・ステイタスと8つの心理社会的課題への取り組み方の関連を検討し，各心理社会的課題が相互に影響しあうヴィジョンを仮説

[1] 本研究では，老年期（第Ⅷ段階）の8つの心理社会的課題を，第1課題（老年期における基本的信頼感 対 基本的不信感），第2課題（老年期における自律性 対 恥・疑惑。以下同様）と記す。

的に示した。しかしこれまでの研究では老年期独特の心理社会的課題への取り組みは実証的，具体的には示されていない。

そこで，深瀬・岡本（2010）は，老年期という発達段階を理解する上で衰退などの否定的要因を排除しないこと，8 つ全ての心理社会的課題を示す必要があることから，高齢者 20 名を対象に Erikson, Erikson, & Kivnick（1986 朝長・朝長訳 1990）と同様の手続きによる半構造化面接を行った。その結果，8 つの心理社会的課題を説明する肯定的要素[2]と否定的要素[2]，および課題に取り組むための努力である中立的要素がそれぞれ抽出された。そして，これらより第Ⅷ段階における 8 つの心理社会的課題を具体的に示した（第 1 課題が感謝 対 不信感，第 2 課題が内的・外的自律 対 自律の放棄，第 3 課題が挑戦 対 目的の喪失，第 4 課題が喜び 対 劣等感，第 5 課題が確固とした自己 対 自己の揺らぎ，第 6 課題が揺るぎない関係 対 途絶え，第 7 課題が祖父母的世代性 対 隔たり・逆転の拒否，第 8 課題が統合 対 否認・後悔）。また，特に老年期に顕著となる第 8 課題である統合 対 否認・後悔は，過去および現在への取り組みと，自分が死ぬことへの取り組みという 2 つの視点から構成されていることが認められた。しかし，深瀬・岡本（2010）では対象者の基本的属性や生活歴などを含めた総合的な検討は行われていない。

本研究の目的　以上より本研究の目的は，老年期の 8 つの心理社会的課題への取り組みについて総合的に検討することとする。具体的には，深瀬・岡本（2010）で得た語りのデータのうち，第 8 課題（統合 対 否認・後悔）への取り組み方によって対象者を類型化し，得られた類型と基本的属性，尺度による課題達成度，その他の心理社会的課題への取り組み方，生活歴との関連を考察する。

高齢者の語りを人生への評価という観点から類型化した研究として，山口（2000）が挙げられる。山口は未解決の葛藤の有無と統合の試みの有無という 2 つの類型化基準項目を用い，積極肯定型，事実報告型，評価活発型，評価保留型の 4 つの類型に分類した。さらに対象者の生活歴とその解釈から類型の特徴をまとめている。このように，類型の特徴について生活歴を含めて検討する方法は，対象者の全体像をつかむ有益な方法であると考えられる。そこで本研究でも山口（2000）を参考に，類型ごとに典型事例を示し，その解釈からの考察を試みる。

次に数量的検討のために用いる尺度について検討する。これまで心理社会的課題に関する研究では尺度作成が中心であったことから，高齢者に適用可能な尺度も散見される（深瀬・岡本，2009）。最も多く用いられているのは Rosenthal, Gurney, & Moore（1981）が作成し，中西・佐方（2001）が完成させた EPSI（Erikson psychosocial stage inventory）が挙げられる。しかし EPSI は主な対象が成人であり，日本の高齢者に適用することが難しいという問題が指摘されている（日下，2004）。これを踏まえて，日下（2004）は高齢者を対象に，8 つの心理社会的課題の達成度を測定しようとする OEPSI（Erikson's psychosocial development inventory for old age）を作成している。この尺度は Erikson et al.（1986 朝長・朝長訳 1990）の記述に基づいており，また短縮版は 12 項目と極めて少なく，高齢者を対象とする場合にはその簡便性の点で優れていると考えられる。

---

[2] 原語は Syntonic と Dystonic である。深瀬・岡本（2010）は，鑪（1986）を参考に，心理力動的観点から「肯定的要素」「否定的要素」と記しており，本研究でもこれに基づき，肯定的要素，否定的要素と記す。

方法

対象者と調査手続き

高齢者 20 名（男性 11 名，女性 9 名。大正 11 年から昭和 18 年生まれの，調査時 65-86 歳。平均年齢は男性 73.45 歳，女性 75.00 歳）に対し，個別に質問紙調査および半構造化面接を実施した。質問紙は日下（2004）の OEPSI を用いた。この尺度は 12 項目 4 件法から成り，得点範囲は 12 点 - 48 点で，点数が高いほど各発達的危機に健全に対処していることを示す。続いて生活歴と心理社会的課題に関する質問を行った（深瀬・岡本，2010）。なお，本研究は広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

類型化の手続き

以下に示す，深瀬・岡本（2010）で認められた第 8 課題（統合 対 否認・後悔）への取り組み方を構成する 2 つの指標を用いた。また，この 2 つの指標で分類すると，Figure 1 に示した 4 つの類型（統合群，過去の統合・死の否認群，後悔・死の統合群，後悔・否認群）が見出されると考えられる。

指標 1：過去および現在の人生への取り組み方（統合—後悔）　過去および現在の人生の統合とは，過去や現在の自分のあり方に肯定的な評価をしていたり，後悔や葛藤に積極的に取り組む状態である。深瀬・岡本（2010）の第 8 課題のうち，肯定的要素〈人生に納得〉と，中立的要素〈過去を切り離す〉に該当する場合である。一方，過去および現在の人生に後悔することとは，過去や現在の自分のあり方に否定的な評価をしたり，後悔や葛藤に対して積極的な取り組みの姿勢が認められない状態である。深瀬・岡本（2010）の第 8 課題のうち，否定的要素〈人生に後悔〉に該当する場合である。

指標 2：自分の死への取り組み方（統合—否認）　自分の死の統合とは，自分が死ぬことについて思慮し，それを認める，あるいは認めようと積極的に取り組む状態である。深瀬・岡本（2010）の第 8 課題のうち，肯定的要素〈死を考える〉と，中立的要素〈死を意識〉に該当する場合である。一方，自分の死の否認とは，自分の死について思考せず，死を考えることを放棄する状態である。深瀬・岡本（2010）の否定的要素〈死を否認〉に該当する場合である。

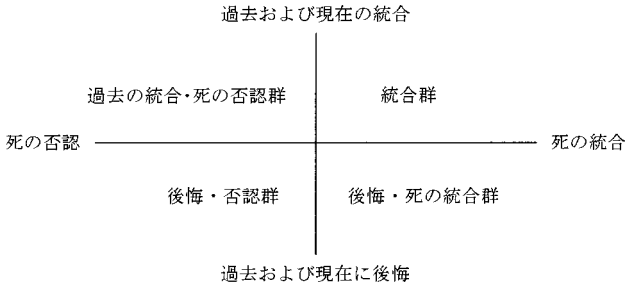

Figure 1. 過去と現在および死への取り組み方に関する分類の概念

結果

過去と現在および死への取り組み方に関する類型

分析の結果，仮定していた4つの群（統合群，過去の統合・死の否認群，後悔・死の統合群，後悔・否認群）および，過去と現在，自分の死に関して語りの得られない語りなし群の5つの類型が見出された。各類型の過去と現在，死の取り組み方の定義と典型的な語りを Table 1 に示した。

Table 1

過去と現在および死の取り組み方に基づく類型

類型	類型の定義	類型の指標	カテゴリの例：語りの例
統合群	過去や現在の後悔や葛藤を含めて自分の人生として認め，自分の死も受け入れた状態。	過去・現在—統合	人生に納得：「人生つらいこととか色々あったけど，振り返ってみると思ったことがある程度は出来たかなって思うんですよ」
		自分の死—統合	死を考える：「病気になっても，いつまでも延命装置でどうこうするよりも，自然に死んでいくのがいいんじゃないかって」
過去の統合・死の否認群	後悔や葛藤があっても，それを含めて自分の人生として認めているが，死を認められない状態。	過去・現在—統合	人生に納得：「（後悔は）いっぱいある。でもそれは理想論で，現実的にみると私は精いっぱいやってきたと思う」
		自分の死—否認	死を否認：「将来はクエスチョンです。あまり考えないようにしています」
後悔・死の統合群	過去や現在の自分の人生における後悔に固執しているが，自分の死は受け入れている状態。	過去・現在—後悔	人生に後悔：「今，「何をやっておけばよかったのかな」って思ったりするんですよね」
		自分の死—統合	死を考える：「私はどういう死に方をするかとか考えますよ。みんなに感謝して死にたいなって」
後悔・否認群	過去や現在の後悔に固執し，自分の死も思考することが出来ない状態。	過去・現在—後悔	人生に後悔：「今は幸せな生活だし。人間早く切り替えないと，いつまでも昔のことを思ってててもしょうがない」
		自分の死—否認	死を否認：「まだまだ死ぬつもりはないです。だから今はまだ体の限界を感じることはないよ」
語りなし群	過去や現在の統合に関する取り組みおよび自分の死に関して自発的な語りが得られない状態。	過去・現在—なし	—
		自分の死—なし	—

統合群は，過去や現在の葛藤を含めて自分の人生として認め，その人生に自分の死を受け入れた状態であった。すなわち，第8課題（統合 対 否認・後悔）に関しては，肯定的に取り組んでいる群であった。**過去の統合・死の否認群**は，過去や現在に後悔や葛藤があっても，それを含めて自分の人生として認めている一方で，将来の人生に死を認められない群である。具体的には，過去の後悔や葛藤に言及し，これを捉えなおそうとしているが，自分の死については語りが得られない，あるいは自分の死を否認する状態であった。**後悔・死の統合群**は，過去および現在の自分のあり方に葛藤が強く，固執しているが，自分の死は受け入れている群である。具体的には，過去や現在に関して語りが得られない，あるいは人生の後悔のみを語る状態である。**後悔・否認群**は，過去や現在の後悔や葛藤に固執しやすく，自分の死を受け入れられない群である。過去を後悔する語りと，過去を切り離そうとする語りが得られている。**語りなし群**は，過去や現在および自分の死に関して自発的な語りが得られない状態である。

類型と基本的属性，OEPSI 得点との関連

対象者 20 名を以上の 5 つの群に分類すると[3]，統合群が 2 名（A，B），過去の統合・死の否認群が 5 名（C，D，E，F，G），後悔・死の統合群が 6 名（H，I，J，K，L，M），後悔・否認群が 2 名（N，O），語りなし群が 5 名（P，Q，R，S，T）だった。類型ごとの対象者の基本的属性と OEPSI 得点を Table 2 に示した。

類型と性別の関連を見るために，各群の人数が少なく検定力には限界があるが，参考のため χ^2 検定を行ったところ有意であった（$\chi^2(4, N=20)=13.13, p<.05$）。残差を見ると，後悔・死の統合群において，女性の方が男性よりも多く，語りなし群において男性の方が女性よりも多いことが示された。

次に，類型と年齢，類型と OEPSI 得点の関連を見るために，それぞれ一要因分散分析を行った。なお，OEPSI 得点については 3 名の対象者において欠損項目が認められたため，この 3 名の得点を除外した。分析の結果，いずれの主効果も認められなかった（$F(4,15)=1.47$, *n.s.*；$F(4,12)=0.57$, *n.s.*）。

Table 2

類型ごとの対象者の属性と OEPSI 得点

類型	No.	性	年齢		OEPSI	
			年齢	*M*(*SD*)	得点	*M*(*SD*)[c]
統合	A	男	75	72.00	33	39.50
N=2	B	男	69	(*4.24*)	46	(*9.19*)
過去の統合・死の否認 *N*=5	C	女	86	77.20 (*6.22*)	44	36.60 (*6.73*)
	D	男	80		35	
	E	男	77		39	
	F	男	73		39	
	G	女	70		26	
後悔・死の統合 *N*=6	H	女	82	73.67 (*5.32*)	41	41.00 (*2.94*)
	I	女	76		42	
	J	女	75		44	
	K	女	73		37	
	L	女	68		34[a]	
	M	女	68		31[a) b)]	
後悔・否認 *N*=2	N	男	81	79.00 (*2.83*)	43	41.00 (*2.83*)
	O	女	77		39	
語りなし *N*=5	P	男	77	70.60 (*5.13*)	37	41.25 (*4.35*)
	Q	男	74		45	
	R	男	71		38	
	S	男	66		45	
	T	男	65		41[a]	

[a] 第 7 項目「孫たちの世話は楽しい」に欠損があった。
[b] 第 3 項目「子どもたちがうまく育ったのは，私が親としてがんばったからだ」，第 5 項目「年をとるにつれて，子どもや孫との関係が深まったと思う」に欠損があった。
[c] 欠損項目のあった対象者の得点を除外して算出した。

類型とその他の課題への取り組みの関連

類型と第 1 課題から第 7 課題の心理社会的課題への取り組み方の関連を検討するため，類型ごとに 7 つの心理社会的課題への取り組み方を示した（Table 3）。**統合群**は，全体的に肯定的要素の割合が否定的要素の割合よりも多く，また否定的要素のみで構成されている課題がない。特に第 3 課題（挑戦 対 目的の喪失）において肯定的要素が強い。ただし，第 1 課題（感謝 対 不信感）への語りが得られていない。**過去の統合・死の否認群**は，第 2 課題（内的・外的自律 対 自律の放棄），第 3 課題（挑戦 対 目的の喪失）において否定的要素が優勢で，その他の課題は肯定的要素や中立的要素の割合が高かった。**後悔・死の統合群**は，第 5 課題（確固とした自己 対 自己の揺らぎ）への

[3]本研究の対象者 No.は，類型と年齢に基づいてアルファベット順につけたものであるため，深瀬・岡本（2010）の対象者 No.とは異なる。

取り組みが中立的あるいは否定的要素から構成されていた。具体的には，過去の自分に納得できないという語りが多く，肯定的な語りが得られなかった。**後悔・否認群**は，第6課題（揺るぎない関係 対 途絶え），第7課題（祖父母的世代性 対 隔たり・逆転の拒否）には肯定的要素が目立つが，第1課題から第5課題までは語りが得られないか，中立的要素と否定的要素で占められていた。**語りなし群**は，ほぼ全ての課題について肯定的要素，否定的要素，中立的要素が認められ，また全体的には肯定的要素が優勢であった。

Table 3

類型ごとの7つの心理社会的課題への取り組み方（%）

心理社会的課題	評価[a]	統合	過去の統合・死の否認	後悔・死の統合	後悔・否認	語りなし
		N=2	*N*=5	*N*=6	*N*=2	*N*=5
第7課題	Pos.	2(100.00)	3 (60.00)	3 (50.00)	2(100.00)	3 (60.00)
祖父母的世代性	Neu.	2(100.00)	3 (60.00)	4 (66.67)	1 (50.00)	5(100.00)
対 隔たり・逆転の拒否	Neg.	1 (50.00)	2 (40.00)	3 (50.00)	1 (50.00)	4 (80.00)
第6課題	Pos.	1 (50.00)	4 (80.00)	4 (66.67)	2(100.00)	5(100.00)
揺るぎない関係	Neu.	1 (50.00)	3 (60.00)	5 (83.33)	2(100.00)	3 (60.00)
対 途絶え	Neg.	1 (50.00)	2 (40.00)	3 (50.00)	1 (50.00)	3 (60.00)
第5課題	Pos.	1 (50.00)	2 (40.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	2 (40.00)
確固とした自己	Neu.	1 (50.00)	2 (40.00)	5 (83.33)	0 (0.00)	3 (60.00)
対 自己の揺らぎ	Neg.	0 (0.00)	0 (0.00)	3 (50.00)	0 (0.00)	2 (40.00)
第4課題	Pos.	1 (50.00)	1 (20.00)	3 (50.00)	0 (0.00)	3 (60.00)
喜び	Neu.	1 (50.00)	0 (0.00)	2 (33.33)	0 (0.00)	2 (40.00)
対 劣等感	Neg.	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (16.67)	0 (0.00)	1 (20.00)
第3課題	Pos.	2(100.00)	1 (20.00)	1 (16.67)	0 (0.00)	3 (60.00)
挑戦	Neu.	1 (50.00)	3 (60.00)	2 (33.33)	1 (50.00)	2 (40.00)
対 目的の喪失	Neg.	0 (0.00)	3 (60.00)	1 (16.67)	1 (50.00)	1 (20.00)
第2課題	Pos.	2(100.00)	3 (60.00)	6(100.00)	0 (0.00)	2 (40.00)
内的・外的自律	Neu.	1 (50.00)	2 (40.00)	2 (33.33)	1 (50.00)	1 (20.00)
対 自律の放棄	Neg.	2(100.00)	4 (80.00)	3 (50.00)	1 (50.00)	3 (60.00)
第1課題	Pos.	0 (0.00)	2 (40.00)	2 (33.33)	0 (0.00)	2 (40.00)
感謝	Neu.	0 (0.00)	2 (40.00)	1 (16.67)	0 (0.00)	3 (60.00)
対 不信感	Neg.	0 (0.00)	0 (0.00)	5 (83.33)	0 (0.00)	0 (0.00)

[a] Pos.は肯定的要素，Neu.は中立的要素，Neg.は否定的要素の略である。

典型事例とその解釈

生活歴や家族との関係と類型の関連を検討するため，類型ごとに典型事例を示し，解釈を述べる。

統合群：対象者A・男性・75歳

農家の第4子として生まれ，「ぶらぶらしてる訳にはいかない」と，高校卒業後に住みこみで技術職に就く。「1からやって。そこでそこそこ一人前に」なった後，大手企業に転職し，新しいシステムを立ち上げる。見合い結婚の後，1女をもうけるも，妻に「子供の面倒は一つも見ないのね」と言われていた。両親の最期は「姉がほとんど面倒を見てました」「私，1回もお見舞いしてないんじゃないかな。仕事が忙しかったしね」。定年退職間際に，大量生産のシステムが導入され，自身の作ったシステムは廃止。「会社としては，大きくなっていくに従って，変えていかないといけなかった

んでしょうね」。退職してすぐに「色んなことに興味があったんで」と，高齢者を対象とした教養講座に申し込み，様々な活動を選択している。「「これどうしたらいいかな」って思ったのは続けられるんですよね。乗り越えながら「こうすればよかったんだな。やっぱりちょっと鈍いんだな」って思いながら」。娘は独立し孫もいるが，「私よりも家内がね，色々してるみたいですよ」。

事例の解釈　これまでの職業人としての肯定的な自己像がAの中核にあると考えられる。また成人期から物事に興味を持ち，果敢に取り組むパーソナリティであることも推察され，現在も，諸機能の衰退を感じながら，それに併せて挑戦している。一方で両親の最期，自分が確立したシステムの廃止，家族や孫との関係など，人生の危機への主体的な取り組みは少ないと思われる。

過去の統合・死の否認群：対象者C・女性・86歳

Cは兄と2人兄妹。青年学校卒業後，警官だった男性と見合い結婚し2子をもうける。戦時中だったため，警官の妻であるCは犯罪に巻き込まれたり，被害者の手当をすることも多く，「そんなことにも私は出会ってるのよ」「主人が半年も仕事でいない時なんて，私が一人で子供と留守番してるの」と，警官の妻として混乱の時代を過ごしたことを中心に語る。定年後に夫は病気で他界し，子ども達が独立して以降は独居。現在は「主人が一番守ってくれてるだろうと思って，主人の写真を携帯の待受にしてる」。ボランティア，教養講座への参加など「すべてが健康管理のため。痴ほうは自分で作るもの」だが，「これから先の活動に，そう望みはない。現状維持」，「一人だから，具合が悪くなったらどうなるのかなって思うことはあるけど，そこまで考えてたら寝れなくなるから考えない」と話す。

事例の解釈　Cは警官の妻という役割を担っていたことに達成感，充実感，誇りを持っている。夫は他界した後も安心感を与えてくれると感じており，その安心感は成人期，中年期のC自身のあり方を支えているとも推察される。現在の生活は身体機能の維持が中心であり，具合が悪くなることへの否認にはやや切迫したものも感じられる。

後悔・死の統合群：対象者J・女性・75歳

兄と2人兄妹。教師になりたかったが経済的理由のため断念し，高校卒業後は事務員として勤め，見合いにて20歳で農家に嫁ぐ。結婚について「若いでしょう。かわいそうでしょう」「街に憧れたんだけど，あの頃は親の言いなりにならないといけなかったから駄目だったわね」。3人の子どもを大学まで行かせ，現在は全員独立して家庭を持っている。夫は長い闘病生活の後に他界。子どもたちと毎日看病し，「だから旦那の介護をもうちょっと何とかしてあげればよかったって思うことは一切ないね」。現在は独居にて農業をしながら，多くの趣味の活動を行っている。それらの活動は若い時からあこがれていた活動であり，「(我慢してきたことが）一気に爆発した感じよね。毎日が楽しいよね」と話すも，終始「現代の若い人が羨ましい。小さい頃から王子様王女様で幸せに生きてるからね」と言う。

事例の解釈　Jは子育てや家庭生活への満足は認められるものの，青年期に主体性を発揮しきれなかったことへの後悔，葛藤がある。現在，これらの主体性を取り戻す試みを行っているが，自由な世代を羨ましいと思う気持ちを終始語るように，青年期に選択できなかったことへの後悔，葛藤は強く残っていると思われる。

後悔・否認群：対象者 O・女性・77 歳

3 姉妹の次女として生まれる。父親は O が幼少期に他界し，小学校の時に母親が再婚したため，O は母方祖母に預けられる。「だから親の味はちょっとよく分かりません。お友達には親はいるから，私にも親がいたらなと何度も思いました」。青年学校卒業後，事務員として数年働き，工場の職人と見合い結婚し，2 子をもうける。一人の子どもは数年前に他界する。「私は小さい頃から不幸な女なんです。人生を振り返ってみて，いい人生じゃないね，もっと幸せになりたかったなと思うところはあります」と言う。夫が 10 数年前に病気で他界した後，子どものいる街に転居。40 数年住んだ田舎を離れたことには「「やっぱり田舎にいた方がよかったな」とは思いませんよね。出てきてよかったなと思う」。街に移り住んで数年目に高齢者を対象とした教養講座に参加。さらに様々な習い事もしている。「今は幸せな生活だし。人間早く切り替えないと，いつまでも昔のことを思ってててもしょうがない」と言いながら，「もっと強い人間になって，あれもこれもすればよかったって思うよね。人並みに」。今後は「私自身は，毎日元気でいれたらって思いますね。これから先のことは分かりませんけどね。自分が死ぬ時のこととかは考えたりはしませんよ。今のところは考えませんね」と話す。

事例の解釈　O は母親の再婚，子どもの死，自分らしさの模索といった危機的状況において，それらを切り捨てることで対処して来たものと考えられる。これらは状況に適応するために用いられているため，自分の死について考えるという危機的状況に関しても，この対処が繰り返され，死を考えない状態に至っていると推察される。

語りなし群：対象者 T・男性・65 歳

T は姉 3 人の長男として生まれる。乳児期に両親が戦死。「数年だったけど，そこで（親から）受けた愛情が私の生きる基盤になってる」と言う。親がいない自分について幼い頃からそのあり方を考えており，小学校高学年ごろに「自分できちっと知ると言うことに精神的に目覚めた」。大学卒業後，大手企業に就職し，教育的役割を担う。また，「生き方に共感する」女性と結婚し，2 子をもうける。一人の子どもが幼くして他界。「その子に対する想いは強かった。私が愛情を受けたようにしっかりと愛情を注ごうという気持ちが強かった」。50 代半ばで定年退職し，「（企業で学んだことから）若い人たちを支援する仕事をしたい」と教員に転職。今回の対象者の中では珍しく調査時に常勤職に就いていた。「（人生）ちゃんとうまく行ってる。親が早く亡くなったり，子どもが亡くなったりということをどこかで埋め合わせしてくれているんだろうと思うんです。神様か誰かが」。

事例の解釈　両親と子の死，人生の転機など，危機的状況が繰り返されているが，いずれにも主体的に取り組もうとしている。また，危機的状況を基盤に自分のあり方を考え続け，自己の連続性を有している。一方で，子どもの年齢が比較的若く未婚のため，T 自身は中年期後期の様態である。

考察

本研究は，深瀬・岡本（2010）における第 8 課題（統合 対 否認・後悔）への取り組み方によって対象者を類型化し，類型と基本的属性，尺度による課題達成度，その他の課題への取り組み方，

事例との関連を検討した。以下，本研究の結果から認められた各群の特徴をまとめ，それぞれの様態を考察する。

統合群　後悔や葛藤を含めて自分の人生として認め，自分の死も受け入れた状態であった。その他の課題についても，肯定的な取り組みの割合が多かったことから，第 8 課題が肯定的であるとその他の心理社会的課題もある程度達成されていることが示唆される。特に第 3 課題（挑戦 対 目的の喪失）への肯定的取り組みが特徴的であったが，これは典型事例の解釈からも示唆され，物事への興味や能力に合わせた挑戦は，後悔や葛藤，自分の死を受け入れる際の重要な要因である可能性が考えられる。岡本（2002）は，これまでのアイデンティティ研究は，西洋的な男性優位の視点であり，自律や他者からの分離-個体化が重要な課題とされてきたと指摘する。本研究でも，A の様に職業人としての自信や肯定的自己評価を有すると，人生への評価が肯定的になることが示唆される。加えて，統計的に有意な傾向ではなかったが，統合群は男性 2 名で構成されていたことから，心理社会的課題がそもそも男性に特化して提唱されたものであり，男性に特に適用されやすいことも推察される。一方で，第 1 課題（感謝 対 不信感）の語りが得られておらず，事例からも危機への主体的な取り組みが少ないことから，問題と適度に距離を置き，これにより，大きな苦痛なく葛藤や死を人生に統合していることも示唆される。

過去の統合・死の否認群　葛藤を含め，これまでの人生を自分のものとして認めているが，自分の死については語りが得られない，あるいは自分の死を否認する様態である。過去および現在の統合に関しては，統合群の結果から示唆された職業人としての自信や肯定的自己評価を有していることから説明できる。すなわち，この類型に該当した 3 名の男性（D，E，F）は職業人としての肯定的自己評価を有しており，また女性（C，G）についても典型事例 C への解釈で示されたように，これまでの人生に「これをやった」という確固たる感覚を有していた。これらの過去への自信が，過去の統合，あるいは過去に葛藤があってもそれを受け入れる基盤になる可能性が示唆される。しかし 7 つの心理社会的課題への取り組みでは第 2 課題（内的・外的自律 対 自律の放棄）と，統合群では肯定的な取り組みが顕著だった第 3 課題（挑戦 対 目的の喪失）に否定的な取り組みであった。これら第 2，3 課題は，心身のコントロールとそれに伴う興味や挑戦であり，いずれも自己の老化に非常に近い概念だと考えられる。隈部（2006）は，青年，中年，高齢者の死への態度を比較し，高齢者は死の恐怖が低く，肯定型受容の得点が高かったが，死の回避，逃避型受容も高かったことから，死の態度に自身の死に対するリアリティの度合いも関連している可能性を示唆している。この知見を踏まえると，過去の統合・死の否認群が死を受け入れがたいこととして，活動の限界や環境の狭まりから，自分の死の近さを実感し，そのリアリティの度合いが増したために，それを安易には受け入れられない状態にあると推察される。

後悔・死の統合群　自分の死は人生に統合しようとするが，過去や現在における人生を評価するような語りが得られなかったり，人生の後悔のみを語るという様態である。該当する 6 名全員が女性であり，これは統計的にも有意な結果であった。さらに，第 5 課題（確固とした自己 対 自己の揺らぎ）への取り組みが中立的あるいは否定的な取り組みから構成されていた。この世代は，貧しい時代に生まれ，特に女性は職業や結婚といった危機に際して自ら望んだ道を選ぶことが難しかっ

たと考えられる。以上の時代背景の影響は，典型事例Jからも示唆され，青年期前後に主体性を発揮しにくかったことへの葛藤，後悔は老年期においても統合することが困難であると推察される。一方で自分の死について受け入れていることは，統合群において認められた問題との適度な距離の置き方から説明ができる。

後悔・否認群　過去や現在における葛藤に固執しやすく，また，自分の死を受け入れられない状態である。第6課題（揺るぎない関係 対 途絶え），第7課題（祖父母的世代性 対 隔たり・逆転の拒否）には肯定的な取り組みが目立つことからも，子孫，配偶者との関係には肯定的な取り組みがなされていると考えられる。しかし第1課題から第5課題までの5つの心理社会的課題への取り組みについては，語りが得られないか，中立的取り組みと否定的取り組みで占められていた。統合群，過去の統合・死の否認群，後悔・死の統合群の考察を踏まえると，第1課題から第5課題までは心身のコントロールや衰退，自身のあり方に関する課題だと示唆される。また，典型事例Oでは過去の葛藤を切り離そうとする様態が認められたことから，後悔・否認群は老年期の身体的，心理的喪失の受け入れが困難であるために，後悔や自分の死といった危機に取り組む基盤が乏しいと推察される。

語りなし群　過去や自分の死について，自発的な語りが得られなかった様態である。該当する5名全員が男性であり，統合群で考察したように，心理社会的課題に取り組みやすい性別であると考えられる。これは，その他の課題への取り組みにおいてはほぼ全て語りが得られており，全体的には肯定的取り組みが優勢であったことからも推察される。典型事例Tの解釈からは初老期というより，中年期後期に該当する様子であったこと，有意な傾向は認められなかったが比較的若い年齢の対象者で構成されていたことから，第8課題（統合 対 否認・後悔）を語らなかったことには，人生の統合の段階に達していないといった説明が可能である。

総合考察と今後の課題

本研究では，高齢者が各心理社会的課題にどのように取り組んでいるのかを総合的に検討するために，20名の対象者から得た語りを，第8課題（統合 対 否認・後悔）を構成する2つの指標から分類し，対象者の基本的属性，OEPSI得点，他の7つの心理社会的課題への取り組み方，生活歴との関連を検討した。分析の結果，5つの類型が抽出され，各類型の特徴は以下のように推察された。1) 統合群は，各心理社会的課題にも肯定的に取り組んでおり，これは危機的状況から適度に距離を置こうとする姿勢が要因である可能性が示唆された。2) 過去の統合・死の否認群は，これまでの自分のあり方に肯定的な評価を有しているが，自分の死に対する現実度の高さから，死の受容は困難な状態であると考えられた。3) 後悔・死の統合群は，青年期前後に主体性を発揮しにくかったことへの葛藤が中核にあり，コホートと性別の影響が推察された。4) 後悔・否認群は，葛藤や危機的状況を切り離すことで対処しているために，葛藤ある過去や自分の死について主体的な取り組みが認められないことが示唆された。5) 語りなし群は，中年期後期の状態であり，第8課題である人生の統合の段階に達していない可能性が考えられた。

なお，本研究で得られた類型と，各心理社会的課題への達成度を測定するOEPSIとの間に有意な

関連は認められなかった。OEPSI も本研究も Erikson et al.（1986 朝長・朝長訳 1990）の記述に基づいているため，測定しようとする概念に大きな違いはないと考えられる。よって，両者に関連が認められなかったことは，OEPSI が質問項目に 4 件法で反応を求めるのに対し，本研究では半構造化面接によって自由な言語での反応を求めたためと考えられる。これは，OEPSI に欠損のあった対象者についても，半構造化面接では欠損のない対象者と同様に多様な語り得られたことからも推察される。

以上，本研究で示された仮説として，回避的な防衛機制と過去の受容あるいは死の受容との関連，OEPSI 等尺度による達成度との測定部分の違いなどが挙げられた。しかしこれらの仮説は限定された高齢者を対象として得られたものであり，今後は対象者，質問項目，分析方法を精緻化して妥当性を確認する必要がある。

引用文献

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.

(エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳) (1977・1980). 幼児期と社会 1・2　みすず書房)

Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton.

(エリクソン, E. H., エリクソン, J. M., & キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) (1990). 老年期: 生き生きしたかかわりあい　みすず書房)

深瀬裕子・岡本祐子 (2009). 老年期の心理社会的課題に関する研究の動向と展望　広島大学大学院教育学研究科紀要 第Ⅲ部(教育人間科学関連領域), **58**, 207-213.

深瀬裕子・岡本祐子 (2010). 老年期における心理社会的課題の特質――Erikson による精神分析的個体発達分化の図式 第Ⅷ段階の再検討――　発達心理学研究, **21**, 266-277.

隈部知更 (2006). 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究――死への態度に影響を及ぼす 4 要因についての分析――　健康心理学研究, **19**, 10-24.

日下菜穂子 (2004). Erikson 理論に基づく老年期の心理社会的発達尺度 (OEPSI) の作成　同志社女子大学総合文化研究所紀要, **21**, 97-105.

中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSI――エリクソン心理社会的段階目録検査――　上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック第 2 版　西村書店 pp.365-376.

岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房

Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**, 525-537.

鑪　幹八郎 (1986). エリクソンの発達論とライフサイクル　村井潤一 (編) 発達　ミネルヴァ書房 pp.160-213.

Viney, L. L., & Tych, M. (1985). Content analysis scales measuring psychosocial maturity in the elderly. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 311-317.

山口智子 (2000). 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み　心理臨床学研究, **18**, 151-161.